



宮坂 静生薦 岳 5 月

卒業を待たず旅立つ一座の子弟問の客猪狩の話など鳥雲に地に立つものゝ小さかり亡き鱈に陰しかとある神事かな鳥帰るつぶつこまんま山盛りに句会へと鯛焼八個懐に芹摘みのひとり残され暮色かな焼芋をベートーヴェンもよろこぶか先生の鉛筆立ての風車満作やいつしか人にマイナンバー子どもにもホスピスのあり花曇弱き陽も溜りて飛驒の浅き春母の忌や軽羹箱につめらるる卒業す養護学校母と子と山巓や二月の空の粗削り

中原 節子
三輪 文代
常田 亥子
山田 一政
千葉 任子
湯田 畦道
市川 美八子
吉澤 澤
阿部 部
森 石
伊 東
下 原
木村 千恵子
橋洋子

わだかまり解くや雪野へ汝を葬り
春の夜の春慶簾笥誰のもの
地吹雪の今がうがうと忌を修す
大空の真ん中に雛かざりたし
凍渡り山の木靈の蹤き来たる
雪激し受け止むる淵無尽藏
猫柳踊りだしそう土人形
卒業ややよ励めよと雲一朶
恋ひ焦るるものを持てとや春の山
春隣山のひとつがいづこかへ
一つ家に一つの橋や猫柳
翻る鳥の尾青し木の根明く
豆腐屋の明り温とき夜明かな
雪降るや雪の積もらぬ原爆ドーム

渡辺暁巳 中野賢助 中漆子 宮子 地子 林子 崎子 木子 愛子 妙子 忠子 子玉子 田子 海子 野子 良子 陽子 三子 清子 水子 逍子 徒子 純子 徑子 西牧千恵子 中南子 斗南子 见敏子

岳俳句・拓くことば

五月

(441)

宮坂 静生

わだかまりとは——永遠の別れ

わだかまり解くや 雪野へ汝を葬り 国見 敏子

永年の確執なのである。死してはじめて解かれる蟠りとはどんなことなのか。性が合わないということであろうか。雪野の下の別世界に逝ってしまった相手を送る一句として、これ以上切なく、重い句はない。永遠の別れとはこの類か。現世の出会いには、仕方がないことが多い。会うは偶然、仕方なく別れる。本当の理解とはなにか。とことん理解し合うなどというのは狂気のようなもの。人間はみな違うことを承知で、合わせることがいつか日常になれば、それが「理解」というものか。ときにアバウトに生きるのが愉しい。

春の夜の春慶簾笥誰のもの住斗南子

「誰のもの」とは古くからの伝来物。もう誰が持ち込んだのか、愛用していたのか来歴不明品か。春慶塗の立派なものだというが、いかにも飛驒高山の旧家の調度品を思わせる。艶な春夜なのが、華やぎがある。衣装をはじめ身辺の必需品を仕舞う簾笥なのが女性の佛などを彷彿とさせ、床しい。

雪激し受け止むる淵無尽藏 海野 良三

構図がいい。激しい雪を受け入れる蒼黒い川の深淵。「無尽藏」に作者の詩想が表現されている。つぎつぎと吹き込む雪をすべて受け入れる懐の大いさに共感したもの。

猫柳踊りだしそう土人形 中村 陽子

雑段を設えるのは豪華すぎるので、吊し雫の類か。大空の真中へ長い吊し雫をたらすのは、およそ原発事故やテロ、さらには天災の地震などの深刻さとは違う平和を求めるさがある。着想の奇抜さに庶民的な愛情が感じられるのがよい。

凍渡り山の木靈の蹤き来たる 清水 道径

早春の凍度り。からっとした春の凍戻りの中、山からの木霊がよく還るという。子どもたちが「ヤツホーヤツホー」などと呼びかけながら山麓の近道を行くさまが想像される。凍度りが冬の季語でないこと、地貌へのまなざしがあって初めて確認された。ことばは地貌に根ざして本来の意味が発見される。勝手に机上の観念操作からは生まれない。

今月の秀句

地吹雪の今がうがうと忌を修す 西牧千恵子

作者の故郷北海道の根釧原野あるいは北見山地辺を思い描く。同じ山国でも信州あたりよりも荒れ方が凄い。その中で忌を修す。連日荒れ模様であれば、地吹雪の凄じさこそ忌を修される當人を偲ぶにはふさわしいと口の端にのぼるほど。句に迫力がある。句の中味もさることながら、一句のリズムが法要の句としては特異な作。いのちを張って生きている。

猫柳を呼ぶ「べんべろこ」は花巻ことば。同じように土人形も花巻人形。猫柳が川端で柔毛をまとうころになると、素朴な土人形が陽気に踊り出しそうだという。土地の風物は同じ空氣の中で、互いにひびき合って生きている。

卒業ややよ励めよと雲一朶 玉木 愛子

「やよ励めよ」は周知の往年の卒業歌。次の句も同じ。

鳥帰る吾が師の恩の歌を背に 岩間 嘉一

「仰げば尊し」「吾が師の恩」という文句が醸すモラルから

今ではほとんど歌われなくなった。が、私は「やよ励めよ」と推され、師友からどれほど生きる力を与えられて来たことか。青空の一かたまりの雲の彼方に、ことあるごとに励まさ

れてきた真実を偲ぶ情は新旧を超えて熱く思い出される。

加藤周一という日本の代表的な西洋近代主義を鼓吹した合理主義の文化人がいた。最晩年、儒教精神の普遍さを訥訥と説いた岩波文化講演会を思い出す。そのことで改めて加藤の著作集や加藤周一論を読み直している。時代の激流がゆすりにゆすった果の儒教の教えには、永世に生きるものがあるのではないか。私はいかなる師であれ、「吾が師の恩」をかけがえのない出会いの尊さとして、貴重に思っている。

恋ひ焦るるものを持てとや春の山 山崎 妙子

芽吹きや花の春の山中を歩きながら「恋ひ焦るるもの」を持たなければ人間は抜け殻だとのことばを囁みしめている。なにごとも、これと定めたならば、人であれものであれ、恋い焦がれる。生きるとはこの一事あるのみ。こう努めたい。た。

春隣山のひとつがいづこかへ 小林 忠男

春近くなつたら、寒中あれほど尖っていた山の一つがどこへ行つたのか、視界から消えてしまった。早い霞にかくれたものか、見当らない。童話の場面を思い、飄逸さに魅かれた。

ひとつ家に一つの橋や猫柳 宮地 和子

拓くことば ⑯ 自句自解(1)・「日に推され」

京都でのリーダー研修会ではたくさんのこと学んだ。私も大いに刺激を受け、嬉しい二日間であった。その中で私の「鳥」の句をめぐって司会者のもと、四人のパネラーが論じ合うディスカッションがあった。

日に推され月に癒され鳥のみち 静生

この句に関して研修会参加者五十人があらかじめ鑑賞を書き、パネラーはそれを踏まえて自説を展開した。司会の佐藤映一が鑑賞する上で大事な点を揚げた一つに、句中のことばをきちんと解釈することを強調されたのが印象に残った。

括句から鳥に託した心象風景を指摘された見事な鑑賞に私は感動した。その上で、作者が贅言を付け加えるならば、「ことば」に即した解釈について二つの点があげられる。

一つ、「鳥のみち」と書き、「鳥の道」としなかったのは鳥の飛翔に拘ったから。後者だと容易に「人の道」を連想して、言いたかったのは人間の生き方だと、道徳心を搔き立てるよう解される。それとなく人道を感じてくださるのは自由であるが、言いたいことはここだとばかりに人間解釈が先行すると俳句が単純化され、詩情が乏しくなる。鑑賞や解釈も詩なのである。新たな鑑賞者

やかな品格ある気持が伝わる。「橋」に興味があり、そこに注目。

ひるがねえとりの尾青し木の根明く 漆戸 洋子

なんの鳥か。瞬間に見とめた尾が青い鳥。雪どけ頃の活発な鳥の世界の一隅に光を当てた。木の根明くて生きた作。

とうふやあかぬく豆腐屋の明り温とき夜明かな 中山 賢助

明治時代、子規の頃でもありそうな句であるが、一見写生句であると同時に、誠実に「もの」に対する作者の心情を感じさせる。景情一つに努めようとしているところに共感した。仙台城下の景か。

ゆきふゆきふるや 雪の積もらぬ原爆ドーム 渡辺 晓巳

重篤の作者であるが、いのちをかけて全身で作句している。その着想に深い思いが漂う。この「原爆ドーム」がそれ。戦後七十年過ぎても尚熱い。いよいよ熱いのである。

次の雪嶺集、前山集の句にも注目した。

待春や笑へばついて来る心 堤 保徳
優しさは雪解雪のやうなもの 唐澤南海子
田の神をふはと抱けり雪ねぶり 清水美智子
暗きほど色深めたる花椿 高松 正明
白酒に手足ほんやりして來たる 志田 成

一座の子——哀愁この上ない

卒業を待たず旅立つ一座の子 中原 節子

サークスの一座か田舎廻りの旅芸人一座。数年居を定めたが、親の都合で、小学校か中学校の卒業間際に地を離れ、旅立つて行った。作者は一座の子と仲良しであったもの。近年は珍しいが、かつて昭和三十年代までは、こんな一座があった。私の記憶にも浪曲師の女の子がいた。今どうしているだろうか。元氣でいるかどうか。ときどき十代の幼い頃の悌を思い出す。顧みると、私は三十代の気分であるが確実に八十歳近い高齢者。未来は洋々の思いでも現実は具体的。階段は手すりを利用して、落ちないようにに氣を使い、思い出すのは過去のことばかり。弱者や貧しい者や不幸な境遇の者への共感が最近いよいよ強い。先が短いからであろう。

ちようもん 弔問の客猪狩の話など 三輪 文代

彗星のように現われた才媛。大胆な作に実感がこもる。亡き人の靈を悼む場でありながら、残酷な猪狩の話が出るとは。暗く落ち込む座を盛り立てようとしたものか。こんなこともあろうと連想が拡がるだけに、すかっと詠われたさばさばした現実味に注目した。期待される新進。

鳥雲に地に立つものゝ小さかり 常田 孝子

思い出される。詩は本来、つねに一つの形には一つの精神が出会い。一期一会である。俳句の五・七・五はつねに固定したものではなく、用いたびに新たな精神が盛られ、五・七・五はつねに新たな五・七・五と化しているという。ここに俳人が永遠の感動を生む基がある。テレビ・スマホ・新聞・雑誌など、ジャーナリズムをあげて、悲願のようにパズルお笑い俳句が流行る現状へ向けて、新たな第二芸術論が待望される昨今である。

春の北国三千里の彼方へ帰る鳥の別れ。それを見送る人も含め草木の小ささ。「地に立つもの」の表現が見事。作者は万年一旬で三十年余りを「岳」誌でやって来られたのではないか。決して休詠しない。いつ欠詠するかと内心気を使つたが、二句組。亥子さんほど辛抱強い作者は「岳」誌にいな。立派だ。ところが最近、長い冬眠から覚めたようになざやかな句を作る。これまた驚嘆。上掲句など上々の秀句。

な
亡き鱈に陰しかとある神事かな
なづかほとひいのう
山田一政

秋田県にかほ市金浦町の金浦山神社で二月四日に行われる神事「鮓祭」。豊漁と海上の安全祈願の祭。大鮓三十本が奉納される。鮓に「陰しかとある」とはびっくり。地の人は違う。鋭い。掛魚祭の句は秋田衆に多いが、掲句も佳吟。

「つぶっこ」は雑穀の意。花巻方言。帰る鳥へ贈つたと

受けとれるが、その時期に東北人は腹いっぱいぶっこまんを食べる意か。帰鳥という体力のいる連想だけに、以下の素朴で力強い表現が生き生きするものと思う。

初登場の作者。甘党揃い。あるいはご婦人衆か。作者の懐の熱も加え、冷めないように気を遣い、おもむろにさし出すのが鯛焼。末広がりの「八個」もよい。

子どもにもホスピスのあり花曇 石井立文

そぞく
卒業す
養護学校
母と子と
木村千恵子

今月の秀句

めふ
芽吹きして男群がる小鳥市
おとこむら
ことりいち
二階堂なつみ

中国か東南アジアの景か。銅鳥の小鳥の売買に市が立つ。「男群がる」に瞠目した。どこか山仕風の男が胡乱者の風情で集まっている。「芽吹きして」と自然界のふき出ものを出したところも匂うようで、空気を搔き立てている。作者は巧者という点では近年出色の句をものす。海外詠も多く、和服を着こなす貴婦人にして着想はときには男っぽい。上掲句も見事。

芹摘みのひとり残され暮色かな 市川美八子

燒芋やきいもをベートーヴェンもよひじぶか
古澤清

ベートーヴェンが焼芋好きとはあまり耳にしないから、ベートーヴェンの交響曲をかけながら焼芋を食べたものか。石焼芋壳がベートーヴェンの曲をかけてというのではない。高

せんせい
せんせい
えん
びつた
かさぐるま
あべ ��惠

関東支部句会では周知であるが、初投句の作者。小学校一年生の先生の鉛筆立て。そこに風車。やさしいイメージにて々。私は今でも小学校の先生になりたい思いがある。先生にとり、はじめて一年生の児童を担任するときほど至福のときはない。先生が神さま。児童も神さまの子。

春早い黄花の満作。不意を突かれた後のやりきれなさの象徴か。国民にナンバーをつけ、一切の家庭の事情まで、どこかがにぎる。日本という収容所に入れられた囚人のごとし。日本人〇〇〇番と登録されるとはなんと怖いことか。反対の声がないのがふしげ。

「弱き陽も溜りて」とはすばらしい詩人のことば。四十一歳。高山の若手代表。思いが拡がる表現に感心した。

弱き陽も溜りて飛驒の浅き春 伊東 寿充

母の忌や軽羹箱につめらるる 下原 培子

軽羹は鹿児島の和菓子。天然の山芋が使われ、主に秋のもの。軽い羊羹の意から名がつく。元禄の島津家第二代綱貴公のお好みとか。母の忌日の法事引出物に用いたものか。鹿児島の作者ならでは、さりげない軽羹の句として珍重。

山巔や二月の空の粗削り 高橋 洋子

大町へ降りると白馬岳へ連なる山巔がぐっと迫る。その地にして「一月の空の荒々しさを「粗削り」とはでかした表現。次の岳集の句にも注目した。